

## 322. 弥生時代の石器からみた滋賀県の 的地域的特色

—守山市小津浜遺跡出土の石包丁と石鏃をめぐって—

### 1. はじめに

守山市山賀町・杉江町に所在する小津浜遺跡は、野洲川下流域に位置し、湖南地域を代表する弥生時代の集落遺跡のひとつです。新守山川改修工事に伴って、昭和61年度から62年度にかけて行われた発掘調査では、整理用コンテナ1,000箱分以上の遺物が出土しましたが、今回は、その中から弥生時代の石器に着目して、滋賀県における弥生時代の様相の一端を見ていきたいと思います。

### 2. 石包丁の使用石材について

小津浜遺跡では、弥生時代に穀類の収穫具として使用されたと考えられる遺物である石包丁（未製品を含む）が、11点出土しています。これらの石包丁の石材を調べてみると、最も多いのは頁岩けつがんに分類できるもので、9点が出土しています。このほか、緑色片岩製のものが1点、石英斑岩製のものが1点出土しており、3種類の石材が使用されています。頁岩製の石包丁の中には、製作途中に廃棄された未製品があり、小津浜遺跡内で石包丁を製作していたことが分かります。

使用されている頁岩は、近畿地方北部に広く分布する丹波層群と呼ばれる地層群などから採集される石材で、滋賀県内でも多くの地点で採集することができます。このため、頁岩製の石包丁は、滋賀県内の弥生時代の遺跡から出土する石包丁の中で、大多数を占めています。一方、緑色片岩製や石英斑岩製の石包丁は、滋賀県内では出土例の少ない遺物です。

緑色片岩などの結晶片岩製の石包丁は、大阪府の南部や和歌山県、奈良県など近畿地方の南半部で多く出土する遺物です。これらの地域の弥生時代中期の遺跡から出土する石包丁の大半は、和歌山県の北部を流れる紀ノ川流域で採集される結晶片岩を石材にして、製作されたものと考えられています。

ところで、石包丁の形態に着目してみると、小津浜遺跡で出土した石包丁の中で、刃の部分が外向きに



小津浜遺跡位置図 (S = 1/50,000)



小津浜遺跡出土の石包丁  
(上から順に頁岩製、緑色片岩製、石英斑岩製)

カーブする形態（「外湾刃」といいます）であることがはっきりと確認できるのは、石英斑岩製の1点だけです。外湾刃の石包丁は、滋賀県内では出土例が少ないですが、近畿地方の中では、弥生時代前期に比較的多く見られる形態です。このことから、小津浜遺跡出土の石英斑岩製石包丁は、弥生時代前期の遺物である可能性が高いと推定されます。

弥生時代中期には、近畿地方北半部では頁岩を含めた粘板岩系の石材を、近畿地方南半部では緑色片岩に代表される結晶片岩を使用して石包丁を製作することが一般的ですが、弥生時代前期の近畿地方では、このほかに奈良県橿原市の耳成山付近で産出する流紋岩などの白っぽい石材を利用した石包丁も多く見られます。小津浜遺跡出土の石英斑岩製石包丁が、どこで産出された石材を使って製作されたものであるのかは確定できていませんが、その白っぽい色調は、一見したところ耳成山付近で産出する流紋岩によく似ています。小津浜遺跡出土の緑色片岩製と石英斑岩製の石包丁は、奈良県などの畿内中心部と、小津浜遺跡が立地する滋賀県南部地域との地域間交流を反映した遺物であると考えられます。

### 3. 打製石鏃と磨製石鏃について

弥生時代の遺跡から出土する石鏃は、石材を打ち欠いて製作した打製石鏃と、石材を打ち欠いたのちに磨いて仕上げる磨製石鏃とに大別できます。磨製石鏃は、近畿地方南半部ではほとんど出土しないのに対して、北半部では出土例が多いという分布の特徴が、古くから指摘されています。

近畿地方では、打製石鏃にはサヌカイトと呼ばれる



小津浜遺跡出土の打製石鏃



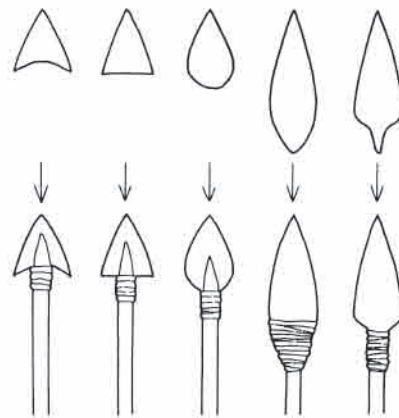
小津浜遺跡出土の磨製石鏃

石材を使用することが一般的で、小津浜遺跡から出土した打製石鏃8点も、サヌカイトを素材としたものです。サヌカイトは、近畿地方では大阪府と奈良県の境にある二上山付近で産出されたものが多く使われています。しかし、弥生時代前期頃には香川県産のサヌカイトを使用する事例も多く、小津浜遺跡出土の打製石鏃が、どこで産出されたサヌカイトを使用したものであるのかは、化学成分の詳しい分析などを行っていないため、未確認です。肉眼的には、重さ21.2gの超大型の打製石鏃1点のみが、他の7点に比べて白っぽい色調をしており、やや異質な感じがしますが、いずれにしても、打製石鏃が滋賀県以外から持ち運ばれてきた石材によって製作されていることには、間違いありません。

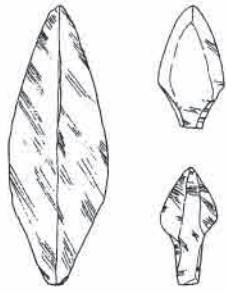
滋賀県と隣接している東海地方や北陸地方では、打製石鏃の素材として使用される石材がサヌカイトである場合は比較的数量少なく、それぞれの地方で産出する石材を使用することの方が一般的です。この点では、弥生時代の滋賀県は、東海地方や北陸地方などの中部日本地域とは一線を画しており、畿内社会の一員として畿内中心部と密接なつながりを持つ地域であったと言えます。

磨製石鏃は、小津浜遺跡では5点が出土しています。使用されている石材は珪質頁岩と呼ばれるものですが、頁岩の一種であるこの石材は、遺跡からあまり遠くない場所で採集することが可能であったと推定される点で、打製石鏃の石材とは対照的です。磨製石鏃は、滋賀県内の弥生時代中期から後期頃の遺跡においては、比較的数量の多い石器ですが、使用されている石材は、小津浜遺跡と同様に頁岩などの粘板岩系石材である場合がほとんどであり、おそらくは滋賀県内で石材を採取して製作した場合が多かったものと考えられます。

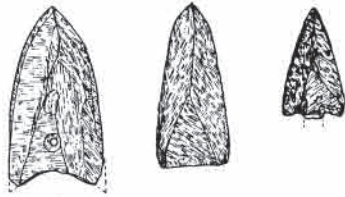
ところで、遺跡から出土する石鏃は、矢柄に装着するための「基部」と呼ばれる部分の形態的特徴から、いくつかに分類されます。その中で、小津浜遺跡出土



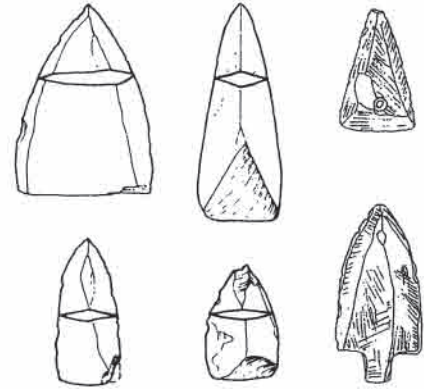
石鏃の型式分類と矢柄の装着方法 (松木 武彦1989による)



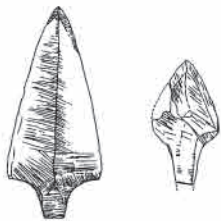
池上遺跡(京都府八木町)



吉河遺跡(福井県敦賀市)



鴨田遺跡(長浜市)



鶏冠井遺跡(京都府向日市)



朝日遺跡(愛知県清洲町ほか)



高田館遺跡  
(高島市)



錦織遺跡  
(大津市)



宮前遺跡  
(草津市)



下之郷遺跡  
(守山市)



服部遺跡  
(守山市)



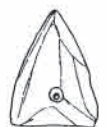
吉身西遺跡  
(守山市)



坊袋遺跡  
(栗東市)



立花遺跡  
(米原市)



桜内遺跡  
(伊香郡余呉町)

各地出土の磨製石鏃 (遺物実測図はS = 1/2)

の磨製石鏃は「有茎式」や「凸基Ⅱ式」と呼ばれる形態のもので、このような形態の磨製石鏃は、滋賀県内では湖南地域や大津市域・湖西地域にかけて、主に分布します。一方、湖東地域から湖北地域にかけては、「平基式」と呼ばれる形態の磨製石鏃が主流であり、巨視的に見れば、県内を大きく2つの地域に分けることができます。

滋賀県以外の地域に視野を広げてみると、有茎式や凸基Ⅱ式の磨製石鏃は、京都府などで多く見られる遺物であり、平基式の磨製石鏃は、滋賀県より東の中部地方に出土例の多い遺物です。このことから、滋賀県内の磨製石鏃の形態に見られる2つの地域圏は、東西に隣接する地域との交流によって生み出されたものと考えられます。

ただし、福井県敦賀市の吉河遺跡などでも有茎式の磨製石鏃が出土していますし、愛知県を代表する弥生時代の大集落遺跡である朝日遺跡では、有茎式の磨製石鏃が平基式のものよりも多く見られます。中部地方においても、必ずしも統一的な型式の磨製石鏃が使用されていたわけではないという点には、注意しておく必要があります。

小津浜遺跡では出土していないのですが、もう1つ取り上げておきたい特徴的な磨製石鏃として、「有孔磨製石鏃」と呼ばれる中央に孔をあけた形態のものがあります。有孔磨製石鏃は長野県を中心として、中部地方から関東地方にかけて主に分布する遺物ですが、小津浜遺跡と同じ守山市内においても、服部遺跡や吉身西遺跡で出土しており、東日本地域からの影響が、この付近にまで及んでいたことがうかがえます。ただし、長野県などでは凹基式の形態を示す有孔磨製石鏃が多いのに対して、滋賀県内では平基式の有孔磨製石鏃が多く、有孔磨製石鏃は遠隔地から搬入されてきた遺物ではなく、ほとんどが地元で製作されたものであろうと考えられます。

ところで、滋賀県内の弥生土器を形態や文様の特徴から分析してみると、弥生時代後期頃には、滋賀県は北部(北近江)と南部(南近江)の2つの地域に大別されることが、以前から指摘されています。北近江地域の土器は、東海・北陸・北近畿といった地域と共通する要素が多く、特に愛知県の尾張地域を中心とした東海地方の土器様式の影響を強く受けています。一方、南近江地域は、文様で飾られた受口状口縁甕が特徴的にみられ、強い独自性を示す地域といわれています。このような弥生土器の様相を、今回取り上げた磨製石鏃の形態にみられる地域圏などに関連させて検討していくことによって、弥生時代の滋賀県の地域的な特色を、より明らかにしていくことができるものと思われれます。

## 4. おわりに

ここまで見てきたように、弥生時代の石器に使用された石材や形態について分析し、周辺地域の資料と比較検討を行うことによって、当時の地域間交流の様子が垣間見えてきます。

現在でも、滋賀県は近畿地方に含まれる一方で、中部地方との文化的な共通性が見られる部分も多いのですが、弥生時代においても、畿内社会との交流を行いながら、中部地方との関わりがあったこともうかがうことができました。

石器に使用された石材を正確に分析するためには、薄く切って顕微鏡で観察するなどの方法をとることが望ましいのですが、貴重な遺物を破壊してしまうことは好ましくありませんので、通常は、外見を肉眼などで観察して判断するという方法をとっています。このため、石材の産地などについて十分な検討を加えることができない場合が多いのが現状です。今後は、必要に応じて自然科学的な分析方法も取り入れていくことによって、より多くの情報を考古遺物から引き出していくことが必要であろうと思われれます。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 田井中洋介)

### <主な参考文献>

- 『琵琶湖開発関連埋蔵文化財発掘調査報告書6 小津浜遺跡』滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会 2002年
- 酒井龍一「石包丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』第21巻第2号 考古学研究会 1974年
- 松木武彦「弥生時代の石製武器の発達と地域性—とくに打製石鏃について—」『考古学研究』第35巻第4号 考古学研究会 1989年
- 進藤武「近江における弥生石器の消長」『滋賀考古』第7号 滋賀考古学研究会 1992年
- 田井中洋介「滋賀県における弥生時代の石鏃の変遷についての素描」『紀要』第11号 (財)滋賀県文化財保護協会 1998年
- 寺前直人「近畿地方の磨製石鏃にみる地域間交流とその背景」『国家形成期の考古学—大阪大学考古学研究室10周年記念論集—』大阪大学考古学研究室 1999年
- 高野陽子「近畿地方北部の土器」『考古資料大観』第2巻 小学館 2002年
- 仲原知之「弥生前期の石包丁生産と流通—近畿における石包丁生産・流通の再検討Ⅲ—」『紀伊考古学研究』第5号 紀伊考古学研究会 2002年
- 中川和哉「近畿地方における粘板岩製石器の生産と流通に関する予察」『同志社大学考古学シリーズⅧ 考古学に学ぶ(Ⅱ)』同志社大学考古学シリーズ刊行会 2003年